特集

子どもたちに当たり前の学校を

教育条件を考える

特別支援学校、特別支援学級、通級指導教室に在籍している児童生徒数は増えていても、「先生が足りない」「教室が足りない」。教育条件の劣悪さは長年にわたって放置されてきました。通常の学校では当たり前にある学校設置基準がなかったことも原因の一つです。国は基準策定へと方向転換をしましたが、ゆきとどいた教育条件の整備につながる基準となるように、さらなる運動が進められようとしています。

今回の特集では、教育環境の改善を求める各地の運動から保護者や教職員、関係者はどのようなねがいをもって運動を進めてきたのか、それぞれが向き合う課題とあわせて考えていきます。発達を保障するゆたかな実践を展開できるための教育条件を全国の仲間とともに求めていきましょう。

せんせい増やして 安全に安心して 学校に通えるように

障害のある子どもたちの教育・生活をゆたかにする東京の会
三原瑞穂

先生が足りない！

私の子どもは、2021年3月に知的の特別支援学校の高等部を卒業しました。

小学部に入学した時は担任の先生が3人もいましたが、小学5年生の時に担任が1人になってしまいました。こんなに手がかかる子ども6人に先生1人?! とびっくりしました。

そこであちこちに「担任が1人しかいないんですけど、おかしくないですか?」と声をかけていたところ、「障害のある子どもたちの教育・生活をゆたかにする東京の会（東京の会）」を紹介してもらい、入会しました。

東京の会で勉強していってわかったことは、「教職員配置基準」に基づいて先生を配置していますが、これは、学校が大規模になるほど子どもあたりの先生の割合が少なくなってしまうこと、高等部がいちばん先生の割合が多く小学部が少ないため、小中高の学部がある学校に比べて、小学部単独、小中学部のみの学校は先生の割合が少なくなること、また、東京都の知的の特別支援学校は「外部専門員」を導入することで、先生の数がその分少なくなっていること（肢体不自由の特別支援学校は「介護職」を導入することで、先生がその分少なくなっている）です。

また、より手厚い支援を受けることができる、1クラスあたりの子どもの数が少ない「重度重複学級（重複障害学級）」の割合が他の県に比べて少ないこともわかりました（2019年度の肢体不自由校の実態をみても埼玉・千葉・神奈川県が重度重複学級の設置率がいずれも85%を超えるのに対して、東京都は40%程度）。本来であれば、子どもの実態に合わせて、重度重複学級を設置することになっているのですが、東京都の場合、こんなに生徒が増えているのに、東京都全体の重度重複学級の数は20年以上も変わっていません。つまりは必要な支援を受けることができず、先生が足りない状態になってしまっています。

東京の会では毎年東京都教育庁に要請を行なっています。保護者の生の声を届けるチャンスということで重要視しています。しかし、訴えたからといってすぐに改善されるわけではありません。結局、私の子どもが卒業するまでには解決できませんでした。でも自分の子どもには間に合わなくても、おかしいことはおかしいと声をあげ続けなくては変わりません。これからも活動を続けていきます。

都議との懇談

スクールバスの三密問題

新型コロナ禍において学校では消毒・換気・三密に気をつけて授業を行なっていますが、スクールバスは三密のままです。特に知的の特別支援学校のスクールバスはほぼ満席状態のままです。これについても東京都に訴えました。

国はスクールバスの増車について予算をつけていて、実際にスクールバスを増車している県もあるようですが東京都では増車していません。東京都の回答は「不特定者が乗るわけではなく、いつも同じメンバーで、乗車の際には手の消毒を行なっている、バスの換気機能もあるから安全」とのことです。

しかし、いつも同じメンバーであっても、家庭はそれぞれです。家庭で感染してバスに乗車する可能性はあります。ついたてもなくとなりに人が座り、マスクが苦手でできない子どももいますし、1時間以上同じ空間にいる状態のどこが安全なのでしょうか。

今年に入ってスクールバスの座席の背に仕切りが何ヵ所かつきました（全席ではありません）。ついている席では前の子に飛沫が直接飛ぶことはなくなりましたが、となりの子とはそのままですし、乗車率、乗車時間はそのままです。

新型コロナ禍において、もともと特別支援学校が抱えていた問題がよりいっそう明らかになっています。子どもたちが安全に安心して学校に通えるように、私たちもさらに声をあげ続けていきます。

（みはら　みづほ）